

# 異文化対応力の習得に向けて タイ・スタディツアーにおける学習成果の事例から

著者	人見 泰弘
雑誌名	名古屋学院大学論集 社会科学篇
巻	52
号	1
ページ	167-182
発行年	2015-07-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000588">http://doi.org/10.15012/00000588</a>

〔論文〕

## 異文化対応力の習得に向けて

——タイ・スタディツアーにおける学習成果の事例から——

人 見 泰 弘

名古屋学院大学国際文化学部

### 要 旨

タイ・スタディツアーで、学生はどのように異文化と国際協力を学んだのか。本稿は、タイで実施した海外スタディツアーにおける学生の学習成果を明らかにする。タイ・スタディツアーは、農村ホームステイ、学生交流、国際協力団体の訪問などを通じて、海外で異文化を体験しつつ、国際協力の現場を訪れるプログラムである。学生の学習成果物を読み解くと、学生はこのプログラムを通じて、以下のことを学習した。一つ目に、文化を相対化する視点を持ち、他文化理解とともに自文化を見直す認識枠組みを習得した。二つ目に、環境や格差といった社会問題に関する認識を深め、人と社会との関係を捉える社会学的想像力を養った。三つ目に、国際協力について関心を深め、自分ができる国際協力の形を提案できた。海外での学習体験をもとに、学生は異文化対応力を身につけ始めている。

**キーワード：**異文化対応力、文化の相対化、社会学的想像力、国際協力のマインド、スタディツアー

## Toward a Development of the Cross-cultural Competence: A Case Study on the Learning Outcome through Thailand Study Tour

Yasuhiro HITOMI

Faculty of Intercultural Studies  
Nagoya Gakuin University

## 1. 問題設定

タイ・スタディツアーで、学生はどのように異文化と国際協力を学んだのか。本稿は、2013年度に名古屋学院大学外国語学部国際文化協力学科（以下、学科）がタイで実施したスタディツアーにおける学生の学習成果を明らかにする<sup>1)</sup>。

学科が実施するスタディツアーは、海外で異文化を体験しつつ、国際協力の現場を訪れ、グローバル化が進む国際社会を生き抜くための異文化対応力の習得を目指すプログラムである。タイ・スタディツアーでは、農村ホームステイ、学生交流、国際協力団体の訪問などを行った。本稿は、このプログラムで作成した報告会資料や成果報告書などの学習成果物を検討し、学生がどのように異文化と国際協力について学び、異文化対応力を習得したのかを明らかにする。

まず先に、スタディツアーの学習成果を論じる意義を記しておきたい。一つ目に、学習プログラムとしてのスタディツアーを今一度強調したいためである。スタディツアーに関する研究では、プログラムの概要を論じる一方、参加者の学習成果を中心に論じたものは決して多くはない。しかし、そもそもスタディツアーは、単なる観光旅行ではなく、参加者の学習を目的としたプログラムである。ゆえにスタディツアーを通じてどのような学びを得たのかを学習者の視点から検証することが、なによりも求められるだろう。たとえば、海外スタディツアーで異文化理解は大きな学習目標の一つとされる。ところが「異文化理解」と一言で表現すれども、具体的に参加者が何を異文化理解と捉えるのかは一様ではない。本稿は参加した学生の行動や意味づけを読み解きながら、学生がどのような体験を異文化体験と捉えているのかを記すことで、異文化体験の具体的な様相を記述する。昨今では、国際機関や民間企業もスタディツアーを実施しているけれども、教育機関である大学が実施するプログラムであるからこそ、学習者の視点から教育効果をふりかえり、スタディツアーのあり方を考えることが必要だろう [c.f. 野中2007: 81]<sup>2)</sup>。

二つ目には、FD活動として、スタディツアーの学習目標や内容、行程や成果を記録しておくためである。学科のスタディツアーは、担当教員が自ら訪問先をアレンジする、オリジナルなプログラムである。訪問する国も期間も、担当教員の手任せに委ねられている。それぞれの教員がどのような目標を立ててスタディツアーを企画しているのかを記録することで、今後のスタディツアーのあり方を考える資料ともなり、さらなるプログラムの改善へとつながるだろう。

これらの意義をふまえつつ、本稿は以下の手順で論じる。まず第二節では、スタディツアーのプログラムについて、学習目標、カリキュラムにおける位置づけ、全体スケジュールを確認する。第三節では、スタディツアーのプログラムのうち、農村ホームステイ、学生交流、都市スラムの訪問に焦点をあて、学生の学びをそれぞれ明らかにする。最後に、学習成果を三つの視点で整理する。すなわち一つ目に、学生が文化を相対化する視点を持ち、他文化理解とともに自文化を見直す認識枠組みを習得したこと。二つ目に、学生が社会問題に関する理解を深め、人と社会とのつながりを考える社会学的想像力を養ったこと。三つ目に、学生が国際協力についての関心を深め、自分にできる国際協力の形を提案できたことである。

## 2. タイ・スタディツアーのプログラム

### 2.1 学習目標

タイ・スタディツアーは、次の三点を学習目標とした。一つ目に、学生がタイの社会構造について理解することである。タイは今では中進国〔末廣2009〕と呼ばれるように、中間所得層の拡大や所得レベルの向上がみられ、消費市場としても注目を集めている〔大泉2011〕。その一方で、バンコク首都圏に代表される都市部では、いわゆる過剰都市化が進んでおり、足元には都市スラムが広がるなど経済格差が目立つ〔人見2013a〕。さらに地方や農村部に目を向ければ、開発にともなう環境破壊や社会保障制度の未整備などが問題となっている〔木村2007, 大泉2007〕。そうした課題を学び、社会問題に対する視点を学習することを目標とした。

二つ目に、学生がタイで異文化を体験し、他文化に対する理解を深めることである。国内外でヒトやモノが移動しており、日本とは異なる文化や習慣と日常的にも接する機会が増えている。スタディツアーを通じて、異文化と対立するのではなく、タイ文化を学び尊重し、その姿勢を学び取ることを目標とした。

三つ目に、学生が日本と異なる国の現状を理解し、国際社会を生きる「国際人」としての責任を考えることである。グローバル化にともない、世界のつながりはより密接になるとともに、経済的不平等や文化摩擦といった政治や経済、文化の領域で世界規模の課題がみられる〔人見2014〕。こうした課題は決して他人事ではなく、自分たちの生活とも密接なつながりがある。グローバル化が進む国際社会を生きる人間として、いかに世界に貢献できるのかを考えることを目標とした。

### 2.2 カリキュラムにおける位置づけ

本学科のスタディツアーは、一年次配当科目である。ゆえに、例年は初年次生の履修者が多い。今回の参加者18名のうち、15名が学科一年生であった。多くが学部専門教育を履修する前でもあることから、スタディツアーでは異文化や国際協力に関する専門知識の活用よりも、異国での生活体験や途上国の現状にふれることをまずは目指した。

二つ目に、初年次生が多いため、スタディツアーへの参加を通して、次年度以降の学習意欲を高める動機づけ効果も期待している。異文化理解や国際協力に関する見識を体験的に深めることで、次年度以降に学生が海外留学や海外ボランティアなどに参加するなど、国際社会への関心を深める機会として位置づけている。

最後に、学生が体系的な学習ができるように、スタディツアーは事前および事後学習を含む一年間のプログラムとして実施した。春学期に実施する事前学習では、それぞれの訪問先について、学生は既存の刊行資料や電子情報、留学生や先輩へのヒアリングから収集した資料を分析し、訪問先について理解を深めた。この事前学習をふまえて、夏季休暇中に二週間ほどの現地学習が実施された。帰国後の秋学期には、事後学習として学生が学内報告会の開催と成果報告書の作成を行い、自分たちの学びのふりかえりを行った。

### 2.3 全体のスケジュール

以上をふまえつつ、タイ・スタディツアーは、2013年8月18日に日本を出発し、同月30日までで、チェンマイ・コンケン・バンコクの三つの都市を訪問するプログラムとなった（表1）。

表1. 2013年度タイ・スタディツアーの行程表

日付	内容
8月18日 日	移動（名古屋→バンコク→チェンマイ）。チェンマイ市内でミーティング
19日 月	チェンマイよりホアファイ村へ移動。NGO・Linkによる活動説明および文化体験（夕食作り）
20日 火	ホアファイ村にてパカニョーの文化体験（お菓子作り、機織りなど）
21日 水	ふりかえり。ホアファイ村からチェンマイ市へ移動。市内にて文化体験
22日 木	移動（チェンマイ→バンコク→コンケン）。コンケン大学（KKU）にてミーティング
23日 金	コンケン大学訪問（キャンパスツアー、先輩インタビュー、KKU学生との交流など）
24日 土	KKU学生との交流および市内にて文化体験
25日 日	移動（コンケン→バンコク）。バンコク市内にてミーティング
26日 月	JICA事務所にて青年海外協力隊事業の説明と協力隊員との懇談。隊員活動現場の視察
27日 火	JICA事務所にて人身取引プロジェクト専門家の講義と意見交換。ODA建設橋梁群の視察
28日 水	プラティーブ財団訪問。活動説明および幼稚園での交流
29日 木	バンコク市内にて文化体験
30日 金	移動（バンコク→名古屋）。ミーティング後に解散

チェンマイでは、農村開発や環境保護などを学ぶため、NGO・Linkの農村ホームステイプログラム〔木村2007, Linkホームページ〕を体験した。都市と地方との経済格差が大きいタイではあるが、とくに北タイでは住民の権利や生活を見捨てて開発が進められてしまった〔木村2007〕。ホームステイをしながら北タイの現状と当地の人々の生活全般を学んだ。

続くコンケンでは、コンケン大学人文社会学部日本語学科の学生との交流プログラムを体験した。ワールドカフェというアクティビティを通じて、大学生同士でお互いの社会や文化を知り合う機会を持った。

最後のバンコクでは、都市スラムの歴史や現状を学ぶために、当地で活動するプラティーブ財団を訪問した〔プラティーブ財団2010, プラティーブ財団ホームページ, 人見2013a〕。バンコクの経済格差についてヒアリングや見学を行いながら、都市問題について学んだ。

紙幅の関係から、本稿は農村ホームステイ、大学での学生交流、都市スラム訪問の三つのプログラムに焦点をあてる<sup>3)</sup>。次節では、それぞれのプログラムの詳細を述べるとともに、学生の学習成果を明らかにしよう。

### 3. 三つのプログラムの学習成果

#### 3.1 農村ホームステイを通じた学習成果

まずは、チェンマイでの農村ホームステイである。初日は、NGOスタッフから当地の概要や自然、環境問題について説明を受けた。その後、村の生活を体験するため、食材を現地で収集・調理して夕食を作るディナープログラムに参加した（【写真1】）。学生はグループに分かれ、タケノコや野菜、山菜を集めに里山に入ったり、生きた鶏を絞めて羽をむしり取ったり、お菓子の原材料となるヤシの実を採って胚乳を手作業で削り取ったりした。村人から手ほどきを受けながら、全員で分担して食材を集め、村で集められる食材で夕食を作り上げていった。村の自給自足の生活を学ぶ機会となった。

翌日は、現地のパカニョー文化の体験プログラムに参加した。まずは、もち米を使った伝統菓子作りである。足で使う米つき機でもみ米を精米し、大きな籠でもみ殻と米とを選別した。米は蒸した後、ゴマを加えながらついて餅とした。また生米を笹の葉の容器に入れて蒸したちまきも作った。さらにお菓子作りと並行して、機織り体験も行った（【写真2】）。村人から糸の巻き方や機織り機への糸の掛け方などを聞きながら、一人ずつ機織りを行った。村人たちが伝統的に実施してきた生活様式を体験した。

農村滞在中、日中はディナープログラムと文化プログラムを体験し、夜には一人ないしは二人一組で、村人の家庭でホームステイをした。各家庭では、日本の風景や大学の友人を写した写真を家族に見せたり、日本から持参したタイ語の会話帳を使って子どもたちとコミュニケーションを図ったりし、学生は家族との交流を深めた。

#### ①日本での生活をふりかえる

農村ホームステイでは、村の食生活や伝統文化を通じて、村人の生活のしくみを学んだ。学生



【写真1】村人とともに里山から山菜などを採取して調理する。



【写真2】機織り機を使った伝統的な織物作りを村人から教わる。

は日本とは全く異なる環境に身を置いて生活しながら、日本の生活環境をふりかえる機会を持った。

…二週間のなかで一番印象に残ったのが農村での生活であった……農村生活は、何から何まで自給自足の生活だった。その大変な環境で生活するなかで、普段（自分が）どれだけ裕福な生活を送っているのかと痛感した。大きな葉っぱを雨具にし、また食材となるフルーツや葉っぱを調達し、調理をし、食べるという普段は絶対にできない貴重な体験をすることができた。おいしいご飯を食べられること、学校に行くことのできる環境に感謝しながら生活していこうと改めて思った。村の人々は誰もがみんなに優しく、気配りができる人間であって、仲間思いであり、私まで優しい気持ちになることができた。このようなことは簡単にできることではなく、人間として手本にしたい人物であると思った（A. Y.）<sup>4)</sup>

…この二週間は日本では絶対経験できないことや見ることでないものがあり、現地でしかできない貴重な体験の連続であった……北タイの農村生活では、ご飯は自分たちで食材となるものを見つけに行き、一から調理をするというような食材から調理まですべて自給自足で、日本とは異なる自然環境であった。トイレやお風呂も日本とは異なり、懐中電灯を持って犬のしっぽを踏まないように歩き、家を出て外にあるトイレやお風呂へ行き、水しかないお風呂はまさに「水浴び」であった。日本人が毎日浴槽に温かいお湯をためてお風呂に入ることができたり、熱いシャワーを浴びることができるのは、すごく贅沢で幸せなことだと実感できた。とても貴重な生活を体験できた（M. A.）

村での生活体験と比較しながら、「おいしいご飯が食べられること」「学校に行くことのできる環境」「温かいお湯でお風呂に入れること」など、学生は日本での生活の豊かさを改めて感じる



ことができた。学生は、朝起きてから就寝するまで普段とは異なる環境で過ごしたことで、日常生活全般でさまざまな気づきを得ていた。普段は「当たり前」になっている便利な生活に、改めて「感謝」する姿勢や態度を示した。

## ②濃密な人間関係

日本と村の生活を比べたとき、学生が関心を抱いたのは、村人たちのつながりだった。学生は村人の人間関係の「濃密さ」に深い関心を持った。

…（村では）近所付き合いが素敵だと感じた。日本では、マンションなどで隣に誰が住んでいるのかも分からない状況だ。しかし、村では村全体が家族のようだった。子どもが大きな声で騒いでも許し合える近所関係。ここでは、子どもは宝とされていて、誰の子なのか分からないほどみんなが子どもたちを愛していると感じた。現在の日本では薄れてきている近所付き合い、日本人は見習うべきだと思った。便利な世の中が本当の幸せなのだろうか、考えさせられる二泊三日だった（S. K.）

村での生活は、日本の大正・昭和の時代をみているようだった。（村での生活は）今の私たちの生活レベルよりは数段、衛生環境に劣る。不足しているものも多い。しかし、物に恵まれていなくても人間はみんな幸せそうで、助け合い（ながら）暮らしていた。お互いを信用しあい、家に余所の家の人が勝手に入ってきてても平気なようだった。余所や身内という概念がないのかもしれない。村はひとつの家族みたいだった（H. Y.）

村の家々では、大人も子どもも入れ替わり訪問し合っていた。村には物が充分にはないかもしれないけれども、幸せそうで助け合いながら暮らす様子を、学生は心に留めていた。「村全体が家族」「村はひとつの家族」と表現するほど、その関係の濃密さを学生は感じていた。「便利な世の中が本当に幸せなのか」と自問したように、「豊かさ」や「幸せ」とは何かを考えながら、学生は社会のさまざまなあり方を想像するきっかけをつかんでいた。

## ③食の由来を意識する

農村滞在中に実施したディナープログラムは、村の自給自足の生活を体験するものだ。食材を一から集めて料理する経験を通じて、学生はいつも口にするものが、どのようにやってきているのかをふりかえた。

…村の方々と夕食を作るディナープログラム。生きている鶏を殺し、羽をはぎ、内臓を取り除いて、大きな包丁で骨ごと切って調理する。山から食材を採って来て、村にあるものを使い料理をする。一方日本では、きれいに調理された鶏がスーパーにならんでいる。こんなにも苦労して料理を作ったことがない。鶏を一から調理することですべてきれいに食べてあげようと、



命に感謝していただくことができた (S. K.)

日本では「きれいに調理された鶏がスーパーにならんでいる」光景が当たり前だ。ところが、村で生きた鶏を「絞める」ところから経験した学生は、日本で店先にならぶ鶏も本来は生きていて、どこかで誰かが加工処置をしたのち、店先にならべられていることを意識した。生きた鶏を絞めて生命を食べる経験をした学生は、「命に感謝していただ」き、自分たちが普段から食べたりに飲んだりしている食べ物の由来に敏感となることができた。

また同じディナープログラムを通じて、人間の生活と自然環境とのつながりを意識した学生もいる。

…私たちは、事前学習でNGO団体Linkについて調べていた。そして実際に、Linkの方たちの話を聞いたり農村でホームステイをした結果、今まで私が思っていた森林保護とタイでの森林保護が違うことにとても驚いた。大気汚染、資源不足などが森林保護に関わっていることを知っていたが、普段の生活で私が気をつけることはあまりないと考えていた。しかし、北タイの農村では、食材は山から採ってくるなど森林はそのときの私たちにとって生きるために必要なものであった。木は切っても植えればまた生えてくるが、その間の(村人の)食糧の調達はどうになってしまうのか。「生活するための森林」というのを初めて体感した。今まで、木は切っても植林すればよいのでは?と考えていた私にとって、この2日間は衝撃的でとても良い時間になった (H. Y.)

学生は、森がなくなることが単なる環境問題に留まらず、村人の食糧問題にもつながると述べている。自分たちがディナープログラムで集めた食料は、森から集めたものだった。森がなければ、村人も学生自身も食べることができなくなる。このときまさに、自分が森に生かされていることを学んだ。森は人々が生活を組み立てるうえで欠かせない資源を提供している。村の生活が自然とともにあるという事実から、自然保護の重要性に気づく機会となった。

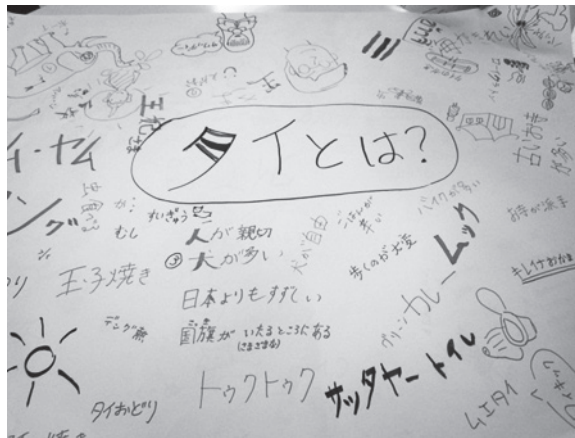
農村ホームステイを通じて、学生は、村の生活と日本での生活とを比較しつつ、「当たり前」となっている日本の生活の便利さと不便さを考える機会を得た。また夕食作りという体験から、普段から口にする食べ物がどのようなプロセスを経てやってきているのかを考えたり、食材を提供する森と村の関係を考えたりする機会も得た。日本とは異なる農村での生活体験は、彼ら自身の日本での生活を相対化するとともに、森や自然と関わり合う社会のしくみを考える機会になった。

### 3.2 学生交流を通じた学習成果

チェンマイの農村を訪問した後、タイ東北部のコンケンに移動した。本学の留学協定校でもあるコンケン大学を訪問し、コンケン大学の日本語学科生とともにタイと日本の文化的な違いを学



【写真3】 タイ人学生と日本人学生とがアイディアを出し合う。



【写真4】「タイとは？」で浮かんだアイディアを模造紙に書き込む。

ぶため、ワールドカフェというアクティビティに取り組んだ。ワールドカフェとは、カフェで会話をするように、参加者が自由に意見を出し合いながら、アイディアを生み出していくアクティビティである。ここでは、タイ人学生と日本人学生とが一緒にグループを作り、お互いに相手国のイメージを出し合う課題に取り組んだ。

ワールドカフェでは、まず「タイとは？」という課題が出された。タイ人と日本人の学生は、「タイ」という国で思いつくものを自由に出し合い、それをタイ語や日本語、絵や図を用いて模造紙に書き込んでいった（【写真3】【写真4】）。書き込まれたアイディアを手がかりにして新たなアイディアをふくらませ、それを模造紙に書き加えていく。この作業を、メンバーを変えながら数回ほど実施すると、一枚の模造紙には、数十個のアイディアが書き残されていた（【写真4】）。グループワークを終えたとき、学生はそれぞれの模造紙に描かれた「タイのイメージ」について話し合い、アクティビティを通じて得た気づきを報告した。タイについてのイメージを出し合っ

た後、今度は「日本とは？」という課題が出され、学生は「日本」というキーワードで思いつくアイデアを模造紙に書き込んでいった。こうして、タイ人と日本人が、お互いに何を自国のイメージとして捉えているのか、外国としてのタイ・日本にどのようなイメージを抱いているのかを考えた。

#### ①タイおよび日本のナショナル・イメージ

まず学生が「タイとは?」「日本とは?」で出し合ったアイデアを確認しよう。「タイとは?」という課題で出されたアイデアには、「暑い」「雨季」といった季節に関するトピック、「マンゴー」「ココナツ」「ドリアン」「パクチー」「トムヤンクン」「パッタイ」「ソムタム」「グリーンカレー」「辛い」といった食文化、「smile」「ほほえみ」「笑顔」「人が親切」「サワディ」「おかま」といった社会習慣、「象」「仏教」「ワットポー」「お坊さん」「王様」といった宗教や王室に関するトピック、「ソンクラン祭り」「ロイクラトン」といった伝統行事、「屋台」「トゥクトゥク」「バイク」「二人乗り」「渋滞」といった街中の風景、「ムエタイ」「タイマッサージ」「シルク」「パタヤ」といった観光や産業に関するトピックがみられた（【写真4】も参照）。日本人学生は、社会習慣、食文化や風景など、目に映りやすいアイデアを書き込んでいた。一方で、タイ人学生は食文化に限らず、「ソンクラン」や「ロイクラトン」などの伝統行事や観光や産業についてのアイデアを出していた。

一方で「日本とは?」という課題では、「腹切り」「サムライ」「餅つき」「相撲」「たたみ」「寺」「おはよう」といった伝統的な風習や生活様式、「四季がある」「さくら」「ひな祭り」「花火」「浴衣」「雪」「スキー」といった季節に関するトピック、「さしみ」「寿司」「納豆」「わさび」「おにぎり」といった食文化、「富士山」「東京ディズニーランド」「新宿」「京都」「スカイツリー」といった観光地、「トヨタ」「新幹線」といった企業などに関するトピック、「カラオケ」「ジブリ」「ドラえもん」「ワンピース」「ナルト」「AKB」といったアニメや漫画といったトピックがみられた。日本語学科で学ぶタイ人学生であったために「相撲」や「たたみ」といった伝統や生活様式、「富士山」や「トヨタ」といったアイデアなど、日本人学生よりも、幅広いイメージを抱いていた。

模造紙を見る限り、「タイらしさ」「日本らしさ」と一言で表現しても、その内容は多岐にわたった。風土や気候、風景、食文化や観光地、伝統行事などが書き込まれていた。学生にとって身近なものという点ではアイデアに偏りがあったと思われるけれども、「タイらしさ」「日本らしさ」といった言葉が指し示すイメージの広さをお互いに学ぶことができた。

ワールドカフェでの学習成果をふりかえった学生は、学内報告会<sup>5)</sup>で以下のような感想を述べている。

コンケン大学の学生とゲーム(=ワールドカフェ)をして交流しました……このゲームをして、自分の思っていたタイの印象とはまた違う、意外な文化を知ることができました。また逆に、自分たちの国のことをタイの人たちに教えるのではなく、タイの人たちから私たちの知らない日本についても気づかされる部分もありました (S. K.)

日本人学生のなかには、タイのナショナル・イメージが予想以上に広いという印象が残された。ワールドカフェに取り組んだときはタイを訪問してからまだ数日間しか経っておらず、事前学習の学びだけでは限りがあったと思うけれども、学生は、現地でタイ人学生と交流するなかで、タイのそれまでのイメージを拡張することができた。

## ②外国から見た日本文化

タイ人と日本人との混成チームで行ったこのアクティビティは、外国人の視点から見た自国のイメージを知るという側面も併せ持つ。外国の人から自国のイメージを説明するように求められるとき、すなわち、外国からのまなざしにさらされるときに、自分のなかの「当たり前」の日本のイメージを考え直す機会が得られる。

…コンケン大学の学生さんたちとワールドカフェというゲームをした。「タイについて、日本について」と大きな画用紙に絵や文字を使って表し交流した。私たちが何気なく見ているアニメや漫画はタイの人たちにとって日本の文化と感じられるようで、私たちも日本は世界からこのような印象なのかと知ることができた (F.Y.)

タイ人学生とのやりとりを通じて、学生は、自分たちが考える「日本らしさ」とは別の「日本らしさ」があることを学んだ。日本に暮らしている限り、自分の国に関するイメージは「当たり前」であり、改めて考える機会はない。タイ人学生のイメージを通じて、自分たちの国がどう見られているのかを知り、日本についてのイメージを捉え直す機会となった。

アクティビティを通じて、模造紙にはタイ人がイメージするタイと日本人がイメージするタイ、そしてタイ人がイメージする日本と日本人がイメージする日本が書き込まれていた。ワールドカフェを通じて、学生はタイと日本のどのような側面に敏感になっているのかを確認し、自分たちが考えるタイ・日本のイメージを知った。同時に、タイと日本の学生は、お互いの国が外国からどのように見られているのかを知り、予想外のイメージやステレオタイプに気づいた。「タイらしさ」「日本らしさ」というナショナル・イメージを探りながら、両国の学生は異文化の違いを考える時間を持った。

## 3.3 都市スラム訪問を通じた学習成果

コンケンを後にし、最後に首都バンコクを訪れた。バンコクには高層ビルが立ち並び、道路には多数の車が列をなし、地下鉄が何本も走っていた。その風景は、日本の大都市と変わらない。しかし一方で、1960年代以降の過剰都市化の進展により、タイ東北部から多数の出稼ぎ労働者がクロントイの港湾地区に住んだことで、クロントイ地区にはバンコク最大規模の都市スラムが形成された。今回のバンコク訪問では、現地でスラム改善活動に取り組むプラティープ財団を訪問した。財団スタッフからスラムの住民の生活環境について聞き取りを行うとともに、スラム地



【写真5】プラティープ財団にてスラムの歴史や現状を学ぶ。



【写真6】クロントイ地区の都市スラムを訪問する。

区を訪問し、スラムに暮らす子どもたちが通う幼稚園で交流を深めた（【写真5】【写真6】）。

#### ①都市スラム問題への関心の深まり

学生は、普段は観光客が訪れることがない都市スラムを訪問し、観光地のすぐ近くで都市貧困層地区が形成されている事実を知った。プラティープ財団を訪問時、学生はなぜスラムが形成されたのか、スラムの人たちはどうやって生活しているのかなどを財団スタッフに質問し、多くの気づきを得ていた。

…このスタディツアーで最も衝撃を受けたのはスラムであった……スラムの奥へ歩いていくと、水は清潔ではなく生ごみが広がり、家もひしめき合って快適だとは言えない光景が広がっていた。バンコクの観光地とはあまりにイメージが異なっていたため、写真を撮ることを忘れてしまうほどだった……スラムのなかを見た後、スラムの子供たちが教育を受けられるよう



に設立されたプラティーブ財団の方に話を聞いた。スラムの子供たちのなかには、親の仕事を手伝わないと生活していけないため学校に行けない子や麻薬などに手を出す子もいることを知った……タイに行く前、事前学習でさまざまなことを学んだ。しかし、実際に現地に行ってみると、発展してきたタイの明るい部分と暗い部分をさらに知ることができた。今回のスタディツアーに参加してタイという国についてや国際協力についてより興味を持った。そして自分たちの生活がどれだけ恵まれているか実感し、さまざまな国が抱える問題を知り、自分にできることは何か考えていく必要があると思った（Y.R.）

…スラム街は本当に家と家が密集しており、道のあちこちにもものすごい量のゴミが転がっていた……都心部のきれいな街並みとのギャップが、まさに途上国と感じた……私たちは、クロントイスラムのなかにあるプラティーブ財団とそこが運営する幼稚園を訪問した。どんな子供だった？と聞かれたら、普通の子供だった。日本の子供と同じで、明るく活発で、とても元気のよい、純粋な可愛い子供であった。外で一緒に遊んだときも、すごく懐いてくれ本当に愛くるしかった。ただ一つ、日本の子供と違うのが環境だ。日本の子供と何一つ変わらなく見える子供たちのまわりには、麻薬や酒・煙草、人身売買、そして酷い差別などたくさん問題がある。スラム街出身というだけで就職できないことが多いそうだ。子供たちに何も非はないのに、その子供たちの将来が生まれた土地とその環境に変えられてしまうことはすごく悲しい現状だ（K.C.）

バンコクの観光地やきれいな街並みとは異なり、スラム内部は家々がひしめき合い、快適とは言いがたい光景が広がっていた。子どもは日本と同じく明るく活発であったけれども、その「環境」は大きく違った。麻薬や差別の問題、学校に行けない子どもという現実を学び、学生は社会の発展のあり方を考えた。それまで訪れたチェンマイやコンケンとも比べつつ、バンコクという都市の発展とその課題を考える学生もいた。

## ②自分にできる国際協力

スラム訪問は、学生が自分に何ができるのかを考えるきっかけともなった。学生は、その思いを報告書に記している。

…スラム街を見たときは、私は甘く見ていたな、と思うほど深刻だった。日本でよく見かけるボイ捨てされたゴミなどはまだいい方だと感じてしまうようなほど、地面や溝などに落ちていた大量のゴミ。そんななかを裸足で駆け回る子供たちを見たときは驚きを隠せなかった。そんな子供たちを見ていたら、ここをなんとかして変えられないのかなと思った。世界にはそのような場所がたくさんあると聞いたので、ボランティアなどに参加して少しでも安心して生活できる街にしてあげたいと思った（T.A.）

スラム街視察後、近くにあるクロントイ幼稚園へ訪問した。給食もあり、とてもきれいな施設だった。スラム街に住む子供たちもここへ通っている。一緒にシャボン玉、折り紙、サッカーなどして遊んだ。言葉は分からなくても、彼らに連れまわされながら楽しく交流した。子供たちの笑顔にスラム街で暮らしているを感じさせなかった。子供の笑顔は世界共通だ。私は、その笑顔がなくならないために、彼らに勉強道具を送りたいと思った。郵便で送るのではなく、現地に自らの足で勉強道具を持ってもう一度訪ねたい。また、こういった現実が世界にはあるということを広めていきたい。自分が見たものを少しでも多くの人に伝えることだけでも、彼らのためになるのではないかと思う（S. K.）

「ボランティアをする」「自ら足を運んで勉強道具を持ってくる」「まわりの人に伝える」といったアイディアは、現地で見聞きしたことから学生ができることとして考え出したものだ。学生は他者に関わる気持ちを持ち、現場で見聞きして、自分なりにできることを形にしようとしていた。これは国際協力に取り組もうとする態度のあらわれと言える。

学生は、都市スラムの訪問を通じて、経済格差という社会問題に関心を持った。そして異国を訪れた自分に何ができるのかを具体的に想像し、国際協力に関する興味や関心を深めることとなった。

#### 4. まとめと結論—国際人としての第一歩

以上、それぞれのプログラムにおける学習成果を明らかにしてきた。最後に三つの観点から、これらをまとめておこう。

一つ目に、学生は文化を相対化する視点を得ていた。ホームステイ、学生交流などから、学生は日本とタイとを比較しつつ、日本社会と比べたタイ社会の良さや日本の特徴を再発見したりするなど、両国の文化や社会を客観的に捉える視点を養った。異国で立場を変えて物事を考えることで、普段から「当たり前」にして気づかない自分の考え方や行動をふりかえることができる。自分の文化に固執してしまえば、文化を客観的に比較する視線を持つことはできない。こうした文化の相対化は、異文化理解や相互理解を進めていくうえで欠かせない経験だ。現地での生活体験を通じて、学生は異文化を尊重し適応するために必要な文化を相対化する視点を習得した。

二つ目に、学生は人と社会とのつながりを想像する社会学的想像力を習得していた。学生は、農村訪問や都市スラム訪問を通じて、村と自然が生活のなかでつながっていたこと、華やかな大都市のすぐそばで格差が広がっていたことを学び、当地の環境問題や格差問題などを考えた。社会学的想像力は、広い意味で社会問題やグローバルな課題に敏感となる態度にもつながるものだ。学生は人と社会との関係を想像する社会学的想像力を身につけ、国際社会への関心をより深めていた。

三つ目に、学生は国際協力のマインドを養成していた。ボランティアやまわりの人々に状況を伝えることなど、学生は自分なりにできる国際協力を形にしようとしていた。他者への関心を持



ち、自分なりに社会にどう貢献できるのかを考えることは、国際協力への関心を深めたことにはかならない。まさに国際人としての責任を自覚した証左と言える。

学生の学習成果物には、異文化理解や国際協力に関わるさまざまな気づき書き込まれていた。お互いの文化や習慣を学び尊重する機会、社会の構造や課題を知るための機会、国際協力の思考を養成する機会として、海外スタディツアーの教育プログラムとしての意義があった。これらで得た学びは、今後国際社会で活躍するうえでは欠かせない異文化対応力の基礎となるだろう。タイ・スタディツアーでの学びを得て、学生は国際人としての第一歩をふみ始めている<sup>6)</sup>。

## 謝辞

タイ・スタディツアーでお世話になったみなさんにお礼を伝えたい。ありがとうございました。

## 注

- 1) 2012年度までに学科が実施したスタディツアーについては、佐竹〔2013〕で整理されている。各年度のスタディツアーの概要については、それぞれの報告書に詳しい。なお、外国語学部国際文化協力学科は、2015年4月に国際文化学部へと学部改組となった。スタディツアーは、国際文化学部において引き続き実施される。
- 2) 大学での教育実践を学習者の視点からふりかえったものとして、たとえば初年次教育における写真観察法の試み〔人見2013b〕がある。
- 3) タイ・スタディツアーでは、本稿で取り上げたもの以外に、コンケン大学で勤務する本学卒業生への「先輩インタビュー」、JICAタイ事務所でのプロジェクト事業に関するレクチャー、青年海外協力隊員との懇談および現場訪問、ODAによって建設された橋梁群の視察なども行った。詳細は、成果報告書（名古屋学院大学外国語学部国際文化協力学科編2014『2013年度 国際協力実習 タイ・スタディツアー報告書』）を参照されたい。
- 4) 学生の感想は、成果報告書にも記載されている。本文中の（ ）は著者自身が補った部分、「……」は省略した部分があることを示している。以下の引用も同じ。
- 5) 学内報告会は、2013年10月23日に実施した。訪問先で学んだことや学生のスタディツアーの感想が報告された。
- 6) 2015年春の時点で、スタディツアーに参加した二人の学生が東南アジアと北米の大学にそれぞれ一年間の海外留学をしたほか、長期休みを使って東南アジアに一人で出かけた学生や短期留学を経験した学生が複数いる。さらに、2015年秋からの海外留学が決まった学生もいる。スタディツアーで海外生活の基礎を体験し、学生はさらなるステップアップを目指している。

## 引用文献

ドゥアン・プラティープ財団 (<http://jp.dpf.or.th/> 最終アクセス日2014.12.30)。

——— 編 2010、『ドゥアン・プラティープ財団30年の歩み—過去の経験から、未来を拓く』。

人見泰弘 2013a, 「バンコクにおける都市スラムの現状と課題—クロンタイ地区のスラムの事例から」, 『名

- 名古屋学院大学論集（社会科学篇）』49(3), pp. 95-106。
- 2013b, 「国際社会学教育の实践と課題—初年次教育における写真観察法の事例」, 『名古屋学院大学論集（言語・文化篇）』25(1), pp. 111-122。
- 2014, 「グローバリゼーション」, 櫻井義秀・飯田俊郎・西浦功編『アンビシャス 社会学』, 北海道大学出版会, pp. 199-216。
- 木村茂 2007, 「森と生きる人々に学んで—北タイの村おこし試行錯誤」, 加藤剛編『国境を越えた村おこし—日本と東南アジアをつなぐ』, NTT出版, pp. 135-163。
- 名古屋学院大学外国語学部国際文化協力学科編（人見泰弘監修）2014, 『2013年度 国際協力実習—タイ・スタディツアー報告書』, 名古屋学院大学国際センター。
- 野中春樹 2007, 「参加体験型・問題提起型学習における教員の役割—サワラク・スタディツアーの実践を通じて」, 『国際理解教育』13, pp. 80-98。
- 大泉啓一郎 2007, 『老いてゆくアジア—繁栄の構図が変わるとき』, 中公新書。
- 2011, 『消費するアジア—新興国市場の可能性と不安』, 中公新書。
- 佐竹眞明 2013, 「スタディツアーの歩みと国際協力に関する省察」, 『名古屋学院大学論集（言語・文化篇）』24(2), pp. 267-280。
- 末廣昭 2009, 『タイ—中進国の模索』, 岩波新書。
- 特定非営利活動法人Link・森と水と人をつなぐ会 ([http://www.geocities.jp/link\\_chiangmai\\_forest/](http://www.geocities.jp/link_chiangmai_forest/) 最終アクセス日2014.12.30)。